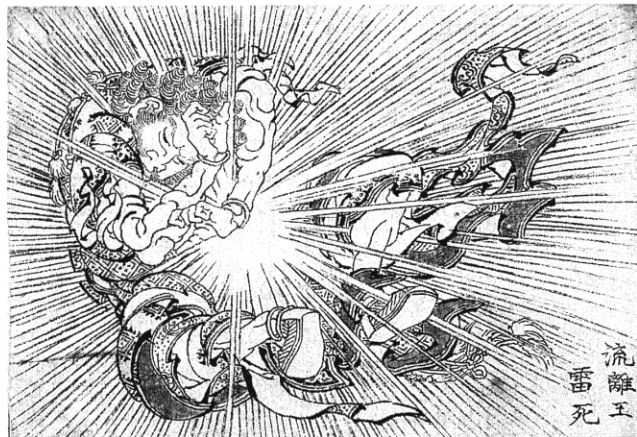




現代の漫画のような光線の描き方が特徴の
葛飾北斎の「流離王雷死」大英博物館提供

103枚 大英博物館

ロンドンの大英博物館で30日から江戸時代後期の浮世絵師、葛飾北斎(1760-1849年)展が始まり、版下絵103枚が世界初公開される。版下絵とは、版面の元となるデザインを紙に描いたもので、通常なら彫り師が木版をつくる過程で絵も一緒に削る。このため残っていること自体が珍しい。躍動感と繊細さが

北斎の版下絵 世界初公開

同居する北斎の筆致を楽しむ貴重な機会となりそうだ。2022年1月30日まで、大英博物館のホームページ上でも閲覧できる。大英博物館によると、版下絵は図鑑「万物絵本大全」図のために北斎が制作したもので1820年代から40年代にかけて描かれた可能性があるという。だが何らかの理由で図鑑は刊行されなかった。その後、フランスの著名美術収集家が所有していたが、1948年に

別の個人収集家の手に渡ったとみられる。2019年にパリで再発見され、大英博物館が20年に購入した。はがきサイズの版下絵は宗教や神話をテーマにした場面や、猫や鳥などの動物を描いたものなどさまざ

ま。「流離王雷死」は現代の漫画とも思えるような細かい線で表現した鋭い雷光が特徴的だ。大英博物館で日本担当の学芸員、アルフレッド・ハフト氏は「北斎が素晴らしい版画デザイナーであると同時に、素晴らしい絵描きでもあったことが理解できます」と話している。

【ロンドン横山三加子】

夢と勇気と優しさと 2021・10・04 (月) Vol.093

【君たちは、今週7日(木)6限が美術の中間テストです】その①

またまた突然ですが、日本美術史テスト事前雑学

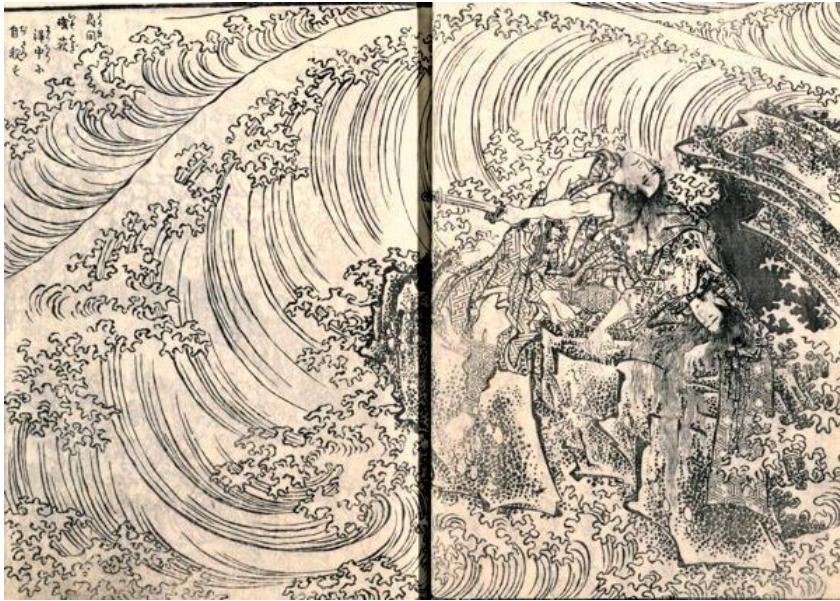
◆以前、「美とは何か」シリーズの最終回(Vol.074)で、『90歳まで真の絵描きを目指し続けた画狂老人：葛飾北斎』を掲載した。確かに72歳から描き出した「富嶽三十六景」実際は四十六景は、北斎の代表作である。

◆しかし、左の新聞記事にもあるように「現代の漫画」とまったく同じような挿絵を描いていた。そして『北斎漫画』(ほくさいまんが)なる、絵手本も制作している。全十五編の半紙本で墨と薄い朱が用いられる。英語圏では「ホクサイ・スケッチ」と呼ばれている。<下図>



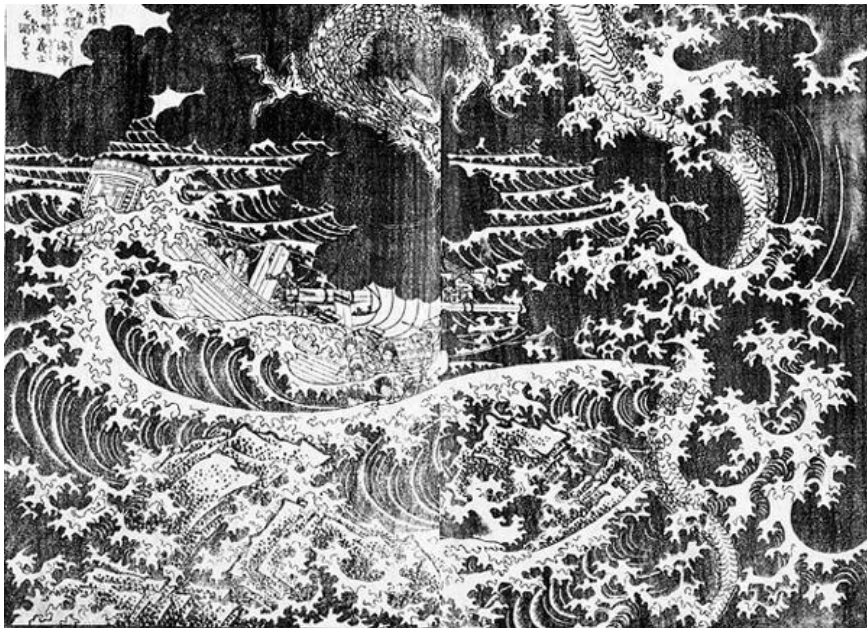
◆そして、江戸庶民を熱狂させたのが、裏面の滝沢馬琴(曲亭馬琴 1767-1848)『椿説弓張月』の挿絵だ。滝沢馬琴は、社会科の教科書にも出てくる。そう「南総里見八犬伝」を書いた読本作者だ。

◆読むことを主とした本のことを読本といい、文字ページと数点の挿絵で構成されている。源為朝ためともは保元平治の乱(保元元年・1156)に敗北して、伊豆大島に流刑るけいとなり、その地で死んだといわれているが、本書では椿説ちんせつ(珍説)とあるように、弓の名手としての英雄・為朝の活躍を中心に描いている。裏面を観ればわかると思うが、画面の枠からはみ出して挿絵を描き、様々な迫力を出す工夫がみられるなど、今の漫画表現と大差はない。



が、驚くべき葛飾北斎挿絵の奇抜さも、大衆受けする大きな要因になった。以後、二人はコンビを組み次々とヒットをはなった。

●主君源為朝を救うため、迫り来る大波を防ぐために、自決して魂魄となって立ち向かう高間太郎。壁と成り迫る浪の描写が素晴らしい。＜上図＞（国立国会図書館デジタル化資料）



＜左図＞
●中央にある太い柱状は、懷中から立ち上る異界からの柱か、又は船の帆柱か判然としない。船を飲み込もうとする渦巻く海の動きは素晴らしい、海中から飛び出した龍を中心に渦を構成している。波をいくつかに描き分けており、面白いのは左下にある波で、板状に重なる四角い波である、重なる波を北斎は板で表現したのであろうか。
（国立国会図書館デジタル化資料）



＜左図＞
●黒煙と共に空中に飛び上がるのは、烏天狗になり魔王となって戦う崇徳院である。黒煙の描写と杵を突き破る動きが素晴らしい。
（国立国会図書館デジタル化資料）



＜左図＞
●嶋袋で雪の中に休んでいた源為朝に、異界からの猛火が吹き寄せる。馬は盾になり猛火に包まれる、鎧や矢立も火に包まっている。異界からの不思議な火の描写と、ゆっくり流れる時間が恐ろしさを感じさせる。背景は黒一色の雪景色、左に流れる炎は素晴らしい。
（国立国会図書館デジタル化資料）

